

地域と学校の文化・スポーツ活動

地域との関係性を見つめ直し、「人間をつくる」文化・スポーツ活動を

櫻井幹二

一 概括

今年度の分科会報告は三本。残念なことに、昨年度の七本から大幅に減少した。内訳は、主に地域における文化活動（演劇・講談）に関するものが二本、学校（中学校）における特別教育活動としての文化・スポーツ活動に関するものが一本であった。

参加者は二日間で延べ二〇名ほど。（司会者、共同研究者、運営委員を含む）今年度も大学生の参加が目立った。

また、今年度から共同研究者として櫻井幹二（札幌白陵高）が加わり、桑原清（道教育大札幌）との二名体制となった。

報告が三本ということもあり、分科会での議論に十分なゆと

りが生まれた。その結果、各報告のテーマにかかわる議論以外にも、学校における部活動や生徒会活動の現状やあり方、その中で地域との関わりなどについて、学生や現場教員からの積極的発言があり、豊かで多面的な討論となった。反面、議論の焦点化と課題の明確化という点では不十分さを残すこととなった。

二 各報告の内容及び議論

報告①「市民参加の演劇づくり〜二〇一三そらちアートシアターのとりくみ〜」

（札幌白陵高・櫻井幹二）

報告者が居住する岩見沢市において、市民劇団公演に脚本作者及び演出者としてかかわった経験から、地域における演劇活動の現状と課題を考察したレポートである。

討論では、まず活動の担い手の多くが、学校の枠を超えた「高校生演劇合同公演」の経験者であった点が注目され、学校教育活動と地域文化活動との結びつきに大きな示唆を与えるものとの評価がされた。また報告では、明らかにした課題として、活動場所の確保の問題、非正規雇用が増加する中で市民の活動参加の時間をどう確保するかという問題、活動組織の維持と財

政基盤の確立という問題などが列挙されたが、これらの諸問題はいずれの地域にも共通する課題であるとの認識が共有された。

課題解決の方策として、報告では個々の活動参加者と地域との人的なつながりを有効に生かすこと、NPO法人化による自治体からの公的財政援助などが示されたが、活動の恒常的な維持という観点からは普遍性を持ち得ないのではないかとという疑問も提出された。

とはいえ、行政に頼らない自立的な文化活動を地域の中でどう構築していくかという視点から、今後考察していくべき重要な課題を提起した報告であった。

報告②「枝中プライドの育成」特色ある学校行事と部活動を通して」

(宗谷管内枝幸中・記虎孝弘)

報告者が勤務する宗谷管内枝幸中学校における文化祭及び野球部の活動を通じ、地域や家庭と協同しつつ、子どもたちに学校への愛着・誇り(枝中プライド)を持たせていくとくみみを述べた報告である。

まず文化祭での特色あるとくみとして挙げられたのは「夢

想連えさしコンテンツ」と「全校合唱」の二点である。「夢想連えさしコンテンツ」では、地域の「よさこいソーランチーム」から直接指導を受けることを通じ、自分の生まれ育った町への理解と愛着が深まっていくこと、「全校合唱」では、全教職員が子どもの主体性を発揮させることを共通認識にし、連携した指導を重ねることで、団結力が生まれるだけでなく、自校への誇り(プライド)も生まれてくることが述べられた。

さらに野球部の活動では、毎日の練習、試合での移動などで町や保護者の支援・協力を仰ぎながら、自分たちの活動を客観的に振り返る手立てを取り、「仲間意識」の形成を意識した指導をしていくことで、大会での好成績も生まれ、子ども自身の成長に大きくつながったことが述べられた。

討論では、子どもの主体的参加の意義と、関係性の自覚による人間的成長という視点の重要性が確認された。同時に、教職員相互、教職員と子どもたち、教職員・子どもたちと保護者・地域との関係性をいかに構築していくかという点でも重要な意義を持つのではないかとの発言がなされた。また、報告者も強調していたが、このようなくみは決して枝幸中学校が特別というわけではなく、宗谷管内では「よく」「ふつう」のとくみであり、その背景には長年宗谷教職員組合が取り組んできた「宗谷の教育合意運動」があるということも確認された。

報告③ 「講談『戸井高校設立の顛末』成立の顛末」

（東家夢助事務所・荒井到）

函館を拠点に講談家として活動する報告者が、閉校が決まった戸井高校の学校祭出演を依頼され、戸井高校建学に懸けた当時の村民の思いを、町史の記述や関係者への取材を通じ、創作講談としてまとめていく経緯と上演の様子を述べたレポートである。

戸井高校は一九五三年、「村立高校」として、小学校の校舎を借用して開校した。その歴史的背景に、江戸期以来の基幹産業である漁業の盛衰とともに、一九四五年七月の北海道空襲による大きな被害があることに着目し、戦後の学制改革を受け、高校を設立した理由には、「学問の必要性」への思いだけでなく、「真の平和への願い」もあつたはずという内容にまとめて発表したことが報告された。

戸井高校での上演では、最初ざわついていた生徒も徐々に真剣に聞き入り、校長からも「感動しました」という言葉をもらったことなどが語られた。

討論では、今、地域での学校統廃合が、「少子化」と「効率化」の名のもと大規模に進行する中で、あらためて、その地域で、なぜその学校が、どういう歴史を背景にして設立されてい

ったのかを明らかにすることは、学校教育の理念・本質にかかわることを再確認することにはかならないことが確認された。

また、戦後の新教育制度発足期には、全国各地において、地域住民の熱い思いに支えられ、困難を克服しながら新制中学校が設立されたといった経緯がある旨の発言もあり、それぞれの地域と学校で、それぞれの「歴史」を掘り起こすことがもつと追求されてもよいのではないかと提起もなされた。

なお、この講談は二日目の昼休み、報告者によって実演され、多くの参加者がその軽妙な語り口を楽しみ、好評を博した。

三 その他、参加者の議論

参加者の意見・議論で特徴的であったのは、学校における特別教育活動（生徒会・部活動）に関することである。

高校現場からは、「授業時数確保」の圧力が強まる中、生徒会行事の時間が削られていこうとする実態と、生徒の主体形成という視点に立脚する学校行事の持つ教育的意義を教職員自身が見失いつつある危機感が表明された。「特色ある学校づくり」とは結果的に「学校間競争に勝ち抜き実績づくり」に収斂されることへの批判的視点を、いかに教職員が保持し続けていけるか大きな課題であることが確認された。

一方、学生参加者からは、とりわけ高校時代の部活動や生徒会活動の自身の経験と、その活動を通じ、自らの持つ関係性の広がりを感じ成長できた意義が、リアルに、生き生きと、具体性を持って語られた。

四 分科会のまとめと今後の課題

今年度の本分科会をまとめると、

- (1) 学校における特別教育活動の持つ意義があらためて明らかにされ深められたこと。
 - (2) それらは、学生参加者の清新な発言によるところが大きく、今後、学生の参加をいっそう促せる可能性が生まれたこと。
 - (3) 学校の特別教育活動と地域の文化・スポーツ活動の関係の深さが確認されるとともに、どのような視点・認識のもとで、自らの実践に結びつけるかという点で課題があること。
 - (4) 「人間をつくる」という核に沿って教育課程を編成していくことの重要性があらためて明らかになったこと。
- ということになるだろう。

また、今後の課題としては、

- (1) 昨年度も指摘されている、議論の焦点化をどうはかるかという点は、分科会のテーマをどう整理するかという点と関連して引き続き考えていかなければならないこと。
 - (2) レポート数が減少してしまい、特に昨年度あった「図書」関係のレポートがなかった点が残念であり、このことも分科会テーマの設定と関連づけて検討しなければならないこと。
- などである。

(北海道札幌白陵高校)